



写真5 葉の退緑症状



写真6 葉の黄化、茎のえそ症状

本病は、キク茎えそウイルス（CSNV）の感染によって発生する病気です。本ウイルスは、ミカンキイロアザミウマによって媒介され、孵化直後の幼虫が感染株を吸汁することによりウイルスを獲得し、保毒した成虫は死ぬまでウイルス伝搬能力を持ち続けます。また、キクは挿し穂で増殖するため親株が感染した場合は、栽培ほ場全体にまん延する危険性があります。しかし、手やハサミでの一般管理作業による汁液伝染、土壌伝染は報告されていません。

ミカンキイロアザミウマとは？

ミカンキイロアザミウマの体長は、雌成虫約1.7mm、雄成虫約1mmです。体色は、雌成虫では夏期に黄色、冬期に茶褐色となり、雄成虫では年間を通じて淡黄色です（写真7）。

生存期間は30℃の条件下で約40日です。

露地栽培では4月頃から、施設栽培ではほぼ周年にわたって発生が見られます。特に、農作物、雑草をとわず花粉を餌とするため花に好んで寄生し、野外では5月以降に急激に増加します。また、幼虫、成虫とも低温に強く、関東地方でも露地越冬の可能性がります。

飛翔能力は低いものの、風に乗って側窓、天窓から施設内に侵入する可能性があります。野菜類、花き類、果樹類など多くの作物を加害し、キクでの症状は、吸汁加害により新芽が褐変し、展開した新葉は葉表にケロイド症状が現れます（写真8、9）。また、花での症状は、淡色系の花弁では褐色のかすり症状が、濃色系の花弁では部分的な退色が発生します（写真10）。

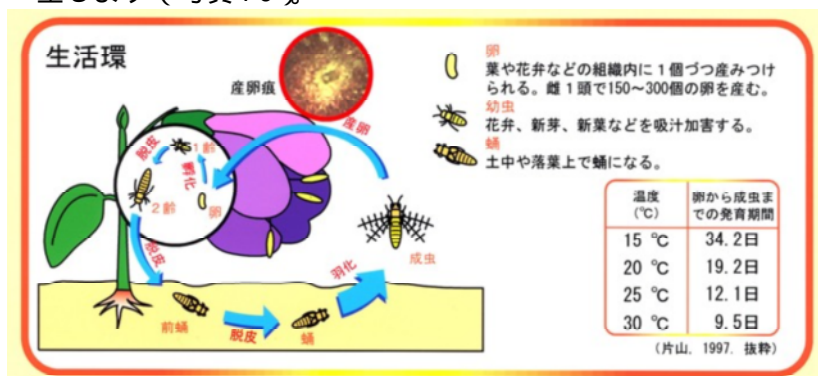


図1 ミカンキイロアザミウマの生活環（大阪府病害虫防除所技術資料より）